曲目解説

歌劇「ヘンゼルとグレーテル」は、1893年に完成し同年初演された。前奏曲はその際には省かれて演奏された。結果は驚く程の大成功で、チャイコフスキーのバレエ「胡桃割り人形」と同様に世界中のクリスマスに欠くことのできないものとなった。初めに曲は、妹の子供らの為にかかれた戯事のようなものであったが、妹の勧めでジングシュピールに書き上げ、後に本格的なオペラに仕上げたものである。筋はグリム童話に基づいているが、より陽気な説話的なものになっていて妹の母親としての子供らへの思い遣りが感じられる。前奏曲は、非常に自由な形のソナタ形式で書かれているものの、主題は4つあり、初めホルンで奏される「夕べの祈り」――これは冒頭にあって聴く者をヨーロッパの森に引き込むような効果を持っている――、トランペットでの「魔女が魔法を解く」、先ずヴァイオリンに表われる「御使の夜の夢に告げし」、それと「魔法は解けた」である。これらの主題が、物語りを編み出していてあたかも変奏曲を逆順に聴いているようで、各主題を絵解きしているような構成になっている。

バレエ組曲「胡桃割り人形」は、同じ年に作曲されたバレエ音楽の本曲から8曲を選んで構成した組曲で、1892年3月、ペテルスブルクで作曲者自身の指揮で初演された。作曲に際して振り付け師のマリウス・プティパは、次のような緻密な注文書をチャイコフスキーに送っている。「……クララがもどってくる。神秘だが優しさのある音楽8小節。クララの驚きに2小節。幻想的で特に舞踊的な音楽8小節。……」といった具合いである。プティパの助言が構成上の重要な意味を持つことは明らかであるが、一方チャイコフスキー自身は、創作に対してのこの過酷なまでの注文にこともなげにしかも精巧な作曲技法で答えている。豊富な着想、主題の創作、楽器のブレンドは、彼の全作品を通じてこの組曲が最も独創的であると言わしめている。しかもこの舞台の、舞踊の、そして幻想的なバレエ音楽は、後にストラヴィンスキーやプロコフィエフに受け継がれることになり、西洋音楽史上では、一系譜の発端として位置付けられるべき作品である。

ベートーヴェンの「交響曲第8番」は、1812年10月にリンツで完成し、1814年2月に公式に発表された。ナポレオン戦争の終盤で、全ヨーロッパが揺れ動く中、彼個人としては、ゲーテとの邂逅、「不滅の愛人」への手紙、そしてベッティーナ・フォン・アルニームという若い女性歌手との交際といった40才代前半の彼の得意の時期にこの「交響曲第8番」は作曲されたのである。この為か主調もヘ長調であり、全曲を通じてオプティミスティッシュな感じがする。但し第1楽章はフラット系の主題にもかかわらずシャープ系の匂いのする雰囲気を持っている。この時期に書かれた「交響曲第7番」や「戦争交響曲」に影響されているのかも知れない。またリズムや第2主題での短3度の和音によるものであるかも知れない。がその中にあって当時オーケストラに定着し始めたクラリネットのオーケストレーションは独創的で面白い。これは、第1楽章の再現部や第3楽章のトリオで指摘できる。

全体は4楽章からなり、しばしば「交響曲第7番」がロマン的なのに対して古典的であると評価されている様に、形式的には均斉の取れたものとなっている。が細部に渡って見まわしたならば、簡単に古典的と断定できないところも多い。例えば、第1楽章の第1主題と第2主題の調関係は、ヘ長調とニ長調とになっていて、本来5度上のものが短3度下になっている。これは再現部も同様で、ヘ長調と変ロ長調の関係にあって、これは4度上にあたる。ベートーヴェンの超古典的作風、言い換えればロマン派的傾向は、第3楽章のメヌエットの、よりスケルツォ的なメヌエットらしからぬ導入部にも窺い知れる。そもそも古典的とかロマン的とか言った見方に無理があるのだろう。近年〝ロマン主義の音楽〟と言うところを〝19世紀の音楽〟と言い換えている傾向が音楽史研究者の間にある。確かに「交響曲第8番」はその真只中にあって、大枠は古典主義の音楽であり、その精神はロマン主義の音楽なのである。古典的かロマン的かどちらかの表札を付けることは、この場合言葉遊びしているふうでもあり、ピンクのバラを赤か白か決めかねている風情でもある。とは言うものの、〝19世紀の音楽〟とはお世辞にもロマンティックな呼び方とは言えないと私には思えるのである。

（藤井部　勉）